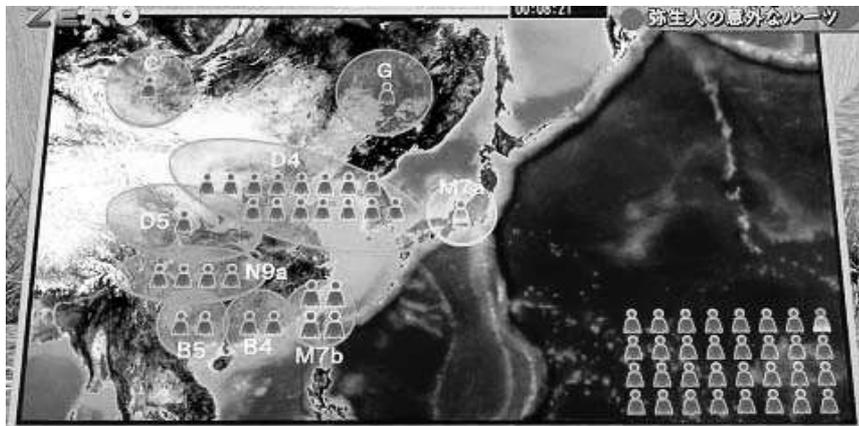


核のDNA分析が可能になったことで質的に大きく変化した技術を用いて、青谷上寺地遺跡の人骨の再分析が試みられました。昨年後半にはまず、ミトコンドリアDNA分析の結果が報告されました。37体の検査から32体の母系が判明しましたが、渡来系が31体と圧倒的で、縄文系は1体のみでした。このことから、世代を重ねて在地の縄文人と混血が深まる前の、渡来して間もない集団の人骨であることが想定されました。中には上陸直後の渡来人が、何らかの理由で在地の人たちに襲撃されたのかもしれないと、想像を逞しくするものもありました。

右の図は、TV放映された32体のハプロタイプ名の内訳と、同じタイプの現代人が多く住む地域を示したのですが、東南アジアの広い地域が含まれることから、都市の住人のような状況を示していると報道されました。1点だけ含まれていた縄文系もM7aと呼ばれるハプロタイプで、縄文系に多いN9bと呼ばれるハプロタイプとは異なっていました。5月の柳浦先生のお話しにもあったように、山陰の縄文人は関東・東北の縄文人とは暮らしぶりも異なっていたようなので、別々の



祖先を持つ人々だったのかも知れません。今年にはさらに、渡来系31体のうち、保存状態の良い6体についてY染色体のDNAの解析が行われましたが、抽出できた4体中、3体が縄文系で、渡来系は1体だけでした。ミトコンドリアDNA分析とは構成割合が反対の結果が出たことで解釈が難しくそうです。大陸で日本の男性と結婚後に渡来した可能性が報道されていますが、少し強引な気がします。

橋本先生のお話しでは、女性より男性の骨の方が残り易いので、出土人骨の性別比は男性多数となることが多いそうです。そのことを参考にした友人の仮説になりますが、男性でもすらっとした渡来人を父に持つ男性より、屈強な縄文人を父に持つ男性の方が残り易いのではないのでしょうか。保存状態が不十分で今回分析されなかった人骨には、渡来人を父に持つものが多く含まれるのではないのでしょうか。元々大規模集落を営むことを好まなかった山陰の縄文人は、沿岸近くに居を構え集団で灌漑水耕を営む渡来人たちとの接触は限られていたかもしれません。今回の結果は、弥生の青谷集落に数少ない縄文人との混血男性の骨が分解しにくくて残存率が高まったことが、圧倒的多数の渡来系母と、多数派の縄文系父をもつ人骨試料となったとは考えられないのでしょうか。現代人に縄文系のDNAが受け継がれているのは、時代が下り渡来人が内陸に展開してから、関東系の縄文人と混血した結果なのではないのでしょうか。分析技術がさらに深化し、測定人骨が増えてくれれば友人の仮説の妥当性も議論できるかも知れません。



江戸時代までは「立ち耳・巻き尾」と表現される、所謂日本犬が古代から日本人とともに暮らしてきました。しかし、江戸時代の終焉とともに開国した日本には、外国から多くの人やモノとともに洋犬も入ってきました。これら洋犬がもてはやされたことや交通網の整備が進められたことにより、洋犬との交雑や地域間での交配が急速に進み、日本犬の純血が失われていく事態を迎えてしまいます。でも、大昔から日本に住んでいた狩猟犬を絶滅の危機から救おうとする、多くの人の保護運動によって辛うじて今の柴犬がいるわけです。

一般的に知られている「柴犬」は「信州系」と「山陰系」の子孫である場合が多くて、信州柴犬は台湾などの南方の犬と近く、一方山陰柴犬は韓国の珍島や済州島の犬と近い関係にあることが、血液中のたんぱく質の調査から分かっています。

橋本先生の講義に登場する土井ヶ浜遺跡は、金関前塾長の父、金関丈夫氏が発掘調査を指揮したことで有名です。金関前塾長は昨年3月にお亡くなりになりましたが、久留米大医学部に献体されたそうです。丈夫氏は、遺言に従って父喜三郎氏の骨を台北帝国大(現国立台湾大)で骨格標本とし、自らも九大で標本になられています。金関前塾長も数年かけて標本となり、3代そろって九大博物館に保管されるそうです。3代揃うことで骨格形成への遺伝的影響を明らかにできるそうです。